

草付き

佐座雄造

俺の予想は見事に当たった。

梅雨の終わりは集中豪雨が日本列島を横断する。その終わりの日をぴたりと当てたのだ。本物の夏は梅雨明け後の一週間だけだ。八月に入ると陽は強烈でなくなり、夕立が多くなる。

夏山はこの一週間に限る。まだ集中豪雨がどこかで暴れているうちに東京を発ち、入山初日に夏を迎えるのが登山家（やまや）の知恵。俺は気象係だ、そしてぴたりと夏の来る日を言い当てた。

今年の夏は少しネラって、北アルプス・剣岳の岩場を目指した。気味の悪い岩肌ばかりの池の谷（いけのたん）をつめて、三の窓周辺の岩をよじる計画だった。

初日は池の谷の入口まで、馬場島から林道を歩かなければならない。初日の重荷はいつでも苦しい。見れば二番目を歩く田沢は汗にまみれている。いつものことだ。その内に歩きが遅れてくるだろう。

岩登りを目的とした今年の夏山合宿だと、うちの山の会ではメンバーが限られる。

四人だけの小さなパーティーになってしまったが、この中に田沢が加わっているのが俺には面白くなかった。

田沢はあだ名を文学青年といわれて、いつでも文庫本を手放さず、意味深い山行記録を残す。動作が鈍く、体力がなくて、山に入れば必ずバテる。バテて尻を蹴飛ばされても、それが山行記録の中で文学になる。蹴飛ばす方の俺にしてみれば、なんだかバカにされたようで気味が悪い。自分のためにパーティー全体が遅れてしまっても、田沢はただ黙り込んでいるだけ。ところが夜のミーティングになると急に勢いづいて、

「我々の目標は低すぎる。もつと上のルートを目指すべきだ」などと一級のクライマー気取りになる。基本である体力や、機敏なセンスがないのに、気持だけが一級だ。一級の気分で東京を発ち、さて岩に取り憑くと急に亀のようになって、惨めに体を丸め、皆から罵声を浴びる。岩のゲレンデでトレーニングすると、誰よりも下手くそで前に進みやしない。

「ほら一步上がってみろ。上がってからホールドを探すんだ」と俺は怒鳴りつける。

田沢はそれでも一步が出ない。そうしているうちに恐怖が増大し、体力を失い、遂には落ちてしまうのが普通なのだが、田沢の場合は不思議に落ちることなく、ゆつくりのまま最後まで落ちない。

気味の悪い男だ。

案の定、田沢は遅れだし、次には動けなくなつて、俺から尻を蹴飛ばされることになつた。

池の谷の入口である沢には堰堤があつて、俺たちはその前の広い川原に幕営した。小さなテントを二張、チーフとシエルパと呼ばれている頑強な先輩が二人、そして俺と田沢が二人とで二組に別れての幕営だつた。空には星が出たし、間違いなく本物の夏と思わせた。

ところが翌朝、妙な冷たさに目を覚ますと、テントの下を水が流れていた。寝袋はビショビショに濡れていた。俺は水滴のついているテントの裾を持ち上げて外を覗いてみた、すると昨日まできれいで少ししかなかった水流が、茶褐色に濁つて波打ち、ゆすぶり、どことんという重量感のある音が谷全体に響き渡つていた。

予想が外れたと暢気な気分ではいられない。全身びしょ濡れの不快さも嘆いてはいられない。すぐに安全な場所に逃げなければいけないのだ。

俺は先輩達を起こし、すぐにテントを水線から遠ざけ、一歩ほど高くなつた段の上に移した。

総て水に濡れ、マッチも一本一本乾かしながら使わなければならなかつた。

天気図を書くとき、それほど悪いとは思えない。そして時折晴れ間がみえたりした。

一日中小さなテントの中で膝を折り、トランプに興じた。

翌日も同じように雨が降つた。瓦は水をたらふく吸い込んだが、水流は変わらずにいた。

三日目もまた同じに雨が続いた。俺たちの計画は四分の一が消えてなくなつた。それでもまだ池の谷を登り詰め、三の窓で少しは岩に取りつくことはできる。

もう雨にも、水の音にも、河原に落ち込んでいる土の斜面に、半分以上顔をのぞかせている大きな岩が、いつ落ちてくるかわからない恐怖にも慣れつこになつて、膝が痛むのだけを我慢して、時間つぶしの遊びを考え出すことばかりだつた。

そして四日目の朝がきた。

ビショ濡れの寝袋ではあつても、寝ている間は温かい。目が覚めるとその冷たさに気づく。背中と尻が冷たく、シャツやズボンが肌にくっついていて不快感を呼び起こしながら、目を覚ました時、目を覚ましたのには何か別の理由があつたように思えた。すると頭の上で人の声があつた。

「危険だぞ」という内容に、俺は反射的にテントの裾をめくつて外をみた。

石の転がる音も、背中に感じる振動も昨日と同じだつたのに、水量だけは昨日の倍以上に膨れあがつて、すぐ近くまで幅を広げ、しかも目の高さにまで波立っている。

血の気が引くような思いをして田沢をみた。田沢はじつと動かず目だけを開き、その目は妙に落ち着いていた。

「危険だぞ」と繰り返す声に「はい、わかりました」という先輩達の声が隣のテントから聞こえた。

俺はすぐに反応して装備をまとめた。急に危険が刻一刻と折つてくるような恐怖を感じた。ザックに装備をまとめながら、煙草を胸のポケットに入れるか、ザックに入れるかで迷つた時、急に恐怖が全身にあふれ、

「とにかく逃げよう」といつて田沢を急がせ、テントの外に出た。今にも鉄砲水が谷全体をのみつくすように思えた。

先輩達も同じに何もたずずにテントから出て来た。登山靴を履くこともできず、ビーチサンダルをつっかけて、二百メートルほど上流にある堰堤に向かつた。

雨足は強まる一方だつた。谷全体が水しぶきの中のようなようだつた。

見ると堰堤から溢れ出る水は、昨日までとはまるで違い、両端に盛り上がった肩の背丈に届かんとするほどに波打っていた。

堰堤には頑強なコンクリートで守られている監視所があつた。俺たち四人は監視所の戸を開けて中に入った。四人とも青い顔をしていた。

ところが監視所の中には外の世界とはまるで違った平和な空気があった。我々を呼びにきた男と老人、そして老人の孫にでもあたるのだろうか、中学生くらいの少年が一人いた。畳の敷いてある部屋で、真夏だというのに炬燵に入っていた。

「さあ、上りなさい」といわれて俺たちは中に入った。老人達の顔があまりにも落ちて着いているので、荷を持たずに飛び出してきたことが恥ずかしくなった。

炬燵の布団を持ち上げると、ヒーターの赤い光が眩しいほどに暖かかった。

小さくなって黙り込んだ俺たちに、老人はお茶をいれてくれた。一人前に垂直の岩場をよじる屈強の山男も、老人達の前では非力な都会の子どもでしかなかった。ただ、老人に従うことしかできないのだと思った。

時間とともに少しずつ平常を取り戻しながら、中学生が俺たちと同じように恐れているのを、俺は期待を込めて観察した。

そんな表情が少しずつ鮮明になると、俺は自分を取り戻し、出された茶に手を伸ばし、窓から灰色の空に黒い線が素速く動いているのをみつけることができるようになった。俺はなんとか自分の勇気を示したくなってきた。それは誰よりも素速くしてしまわなければ格好がつかない。俺はそのチャンスを老人に話し掛けることでつくった。「すごい雨ですね」

隣で田沢が恨めしそうに俺をみた。俺は調子が出て、スラスラと会話を飛ばした。

二人の先輩はチャンスを失ってモジモジしていた。

落ち着きを取り戻すと監視台に出てみた。

すぐ目の前に拡大写真と見間違えるような水の荒れ狂う姿が現れた。

四人が四人ともに手すりをがっちり握っていた。ここでも俺は虚勢を張った。そうでもしないと目の前の水に吸い込まれそうだった。

「すげー、これは勝てませんよ」

さすがのシェルパも俺と同じように

「だいいち、泳げないんだろお前」と笑ってみせた。チーフは黙って手釣りを握っていた。シェルパと俺の会話は尻切れトンボに終わり、ただどんなにもがいても、この水のの前では、自分は一片の紙切れでしかないと思って、虚勢をはるのがバカバカしくなった。田沢は早くにそれを知ったのか、またあの妙に落ち着いた目をしていった。

俺たちのテントはグレー一色の河原に小さな黄色の点となって孤立していた。

「装備を取りにいこう」とチーフがいった。

俺たちはまた河原に飛び出た。今度はもう怖くなかった。老人の落ち着いた顔、監視所の頑強さが安全を保証していた。

監視所に戻って俺たちはラーメンをつくって食べた。シューというコンロの音と、青い炎が友達のように懐かしく感じられた。時間が経過して、畳に横になりたくなかった頃、老人の動きが慌ただしくなった。

監視台に出てみるとさつきから居なくなっていた田沢が水しぶきを受けながら、荒れ狂った水の叫びにカメラを向けていた。

テントのあった河原の段丘は既に濁流に洗われる状態で、下流に逃げる唯一の道は堰堤から続くコンクリートの柵だけになってしまった。堰堤はすっかり濁流に没して、さらに奥にある堰堤も両肩近くまで水に没していた。その肩には数十センチ置きに目盛りがペンキで書かれており、赤い線が一本あって、どうやらそこを越えるところの監視所も危険だと報せるものようだ。そして水の高さはその赤い線に迫っている。

部屋に戻ると、老人が電話で連絡をとっていた。その声全員が耳を傾けたが、濁流の音にかき消されて俺たちの耳には届かなかった。老人は受話器を置くと、「ここも危険になったから山に登ろう」といった。

河原はみるみる変貌していく。もう河原のほとんどが水に没し、監視所から河原に続くコンクリートの柵も濁流に洗われて亀裂が生じ、目の前で一塊が転がり、また別の塊が力負けして崩れ、濁流の中に没していった。俺たちが逃げる道はこれでなくなってしまった。

河原に落ちる急な斜面を安全な高さまで登るには、少し下流に下がる必要がある。その道がなくなってしまった。監視所から続く斜面は岩場ばかりで手がつけられないのだ。

無残に崩れたコンクリートの柵をみながら、俺は不思議に落ち着いていた。ただ無力感に陥っていたのかもしれない。

「早く逃げろ」という老人の声に我に返って、俺たちはもう一度、下流に下がる方法を見つけようとした。すると幸いにも、崩れ落ちたコンクリートの柵と斜面の隙間に堆積していた、それこそ三十センチほどの柵をみつけた。

俺は「あの柵を行こう」といって先頭に立った。足の下には濁流が波打っていた。それを無視して歩くのは岩登りの要領だった。

三十坪ほどトラバースして、まだ安全な斜面には届いていなかったが、草が斜面に張り付いた草つきの部分があつて、そこを這い上がるしかないと判断した。このまま弱すぎる土の棚を四人でトラバースするのは無理がある。

俺は田沢と並んで草付きの斜面を登った。草付きは濡れて滑るだけでなく、体重を掛けるには弱すぎた。それでも隣で登っている田沢が、こんな時でもいつものようにノロくて、バランスを崩しているのがみえると急に勇気が湧いてきた。

俺よりも田沢の方が落ちる確率が高いのだ。俺は余裕さえ出て、

「田沢落ちるなよ、早く上がるんだ」と声まで掛けた。

二坪ほど登った時・・「ビシッ」という音がした。

足下をみると、土の棚と斜面の接触面に、電流が走ったかのように割け目が入つた。そして棚はただの土の棒になつて、濁流の中に落ちていく。チーフとシエルパはまだその棚の上ののつていた。

一瞬・・二人は草付きの斜面に飛びついた。俺は草を掴んでいた片手を、俺の真下に居るシエルパに投げた。シエルパの手首を掴んだと同時にシエルパの重さを感じた。俺の脳は片手で掴んだ草の強さと、シエルパの体重だけを一瞬のうちに計算し、そしてシエルパの腕を放してしまった。俺の脳はあまりにも正直だった。

シエルパはズルツと滑り落ちた。そのまま濁流の中に落ちると俺は思った。

しかし、シエルパは持ち前の機敏さで草をつかみ、その草はシエルパの体重に堪えた。

一秒が過ぎた。誰も声が出なかった。

シエルパが俺の下からニツと笑つてみせた。俺はまぶしくそれを受けるしかなかった。「よし」とチーフが力強くシエルパに声を掛けた。気づいて横をみると、チーフの体も伸びてはいたが、斜面にくっついていて。そして、延ばされた腕を田沢の手がガツチリと握り締めていた。

チーフを見守る田沢の目は、またあの妙に落ち着いた目のままだった。



堰堤の肩を越える濁流



監視所から濁流をみつめるシェルパと監視所の人



河原を飲み込む濁流。しばらくしてコンクリートの部分はすべて濁流に吞まれ落ちたが、壁と草付きの間に残った棚を伝って、右の草付きに取り付いた